

レポート

高大連携の今

高校現場が変わりゆく中で、高校生を受け入れる大学側は、どのような高大連携をはかっていけばよいだろうか。高大連携の現状、実際に行われている先進事例、高校側からのニーズ、今後重視すべき高大接続の視点などをレポートした。

荒尾貴正 リクルート『キャリアガイダンス』編集デスク

実施校数は増加傾向

高大連携が広く行われるようになった契機は、1999年に中央教育審議会(中教審)が提出した「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」という答申である。そこには連携の基本的な考え方が次のように示してある。「これまでのようにいかに選抜するかという視点よりもむしろ、学生がいかに自らの能力・意欲・関心に合った高等教育機関を選択するか、あるいは、大学が求める学生を見いだすか(下線編集部)という観点から考えることが重要だ」という。そして、具体的な連携方策として5つのポイントを示している。

- (1) 高等教育を受けるのに十分な能力と意欲を有する高等学校の生徒が大学レベルの教育を履修する機会の拡大方策
- (2) 大学がその求める学生像や教育内容等の情報を的確に周知するための方策
- (3) 高等学校における生徒の能力・適性・意欲・関心等に応じた進路指導や学習指導の充実
- (4) 入学者の履修歴等の多様化に対応して大学教育への円滑な導入を図る工夫
- (5) 高等学校関係者と大学関係者の相互理解の促進

このような提言を受け、今世紀に入って高大連携は全国の高校、大学において活発に展開されるようになった。現在も数多くの大学が実施していることが文部科学省の調査結果により明らかになっている。

図1のように今、高大連携にはさまざまなバリエーションがある。このうち実施校数が最多のイベントは「オープンキャンパス等」(686校)。90%以上の大学が実施してい

る計算だ。以下、「大学教員が高校へ出向き行う講演等」(566校、75%)、「高校生を対象とした体験授業の開催」(514校、68%)が続く。3年間の実施校数の変化をみると、「オープンキャンパス等」はおおむねマックスに達したようだが、それ以外は全般的に未だ増加傾向を示している。

大学の強みを生かした個性的プログラム

高大連携の名のもとに行われる「講演」や「授業」は、ともすればワンパターンに陥りやすく、成果のあがらないものを毎年繰り返すだけのようなことにもなりかねない。一方で、各大学の強みを生かした個性的な取り組みもある(表1)。

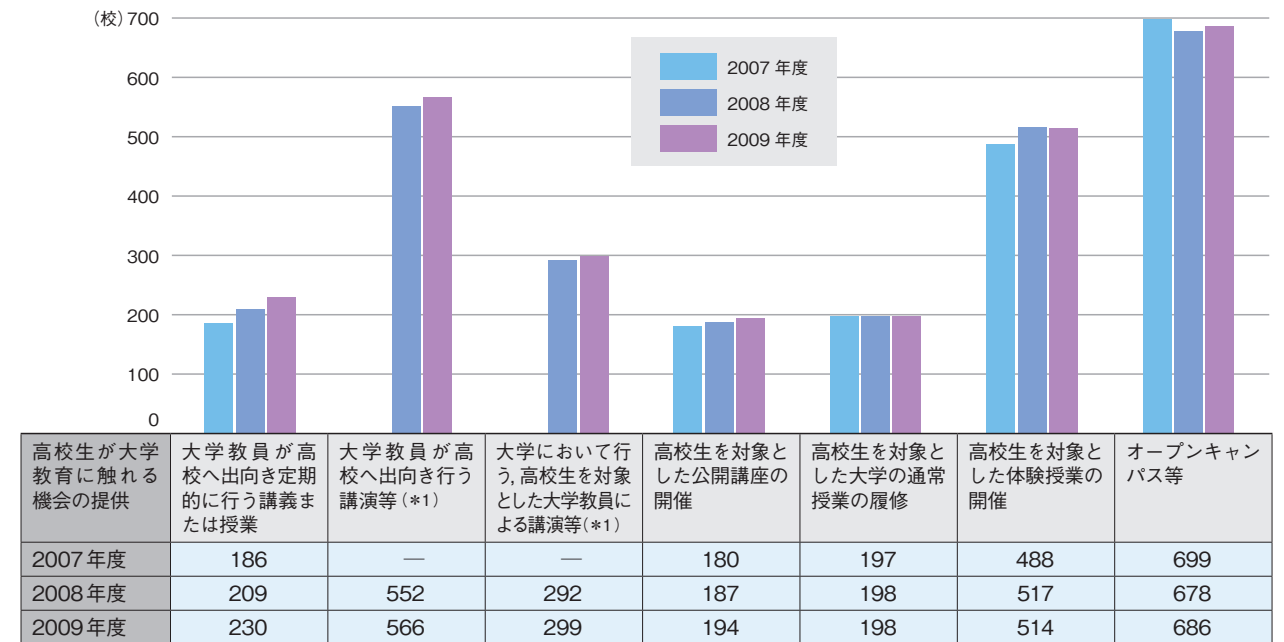
例えば大学の専門性を生かして高校と連携するケース。東北芸術工科大学の体験合宿や東海大学海洋学部の特別プログラム、あるいは獨協大学の英語スピーチコンテストや福山大学生命栄養科学科の料理コンテストなどといった手法は、大学の専門性に期待する高校には有益だろう。

また、ICTを活用することで「場所」や「時間」に縛られず、遠隔地での連携を実現しているケースもある。愛知県立芸術大学は光回線を駆使した双方向の授業で高校の美術、音楽の正課授業を担っている。園田学園女子大学は「そのだインターネットキャンパス」というeラーニングにより、数多くの高校と連携講座を実現している。こうしたスタイルは今後も増えていくのではないだろうか。

高校が高大連携に求めるものは？

高大連携事業に高校側は何を求めているのだろうか？ 関西地区の私立高校に対するアンケート調査によれば、高校の進路指導部長が高大連携に望む企画の1位は「大学の高校生向けの模擬講義」、2位は「大学教員による出張

図1 高大連携の状況



*1 2008年度以降に調査開始。 ※出典 大学における教育内容等の改革状況について(2007年度、2008年度、2009年度) 文部科学省

表1 特色ある高大連携の取り組み例

テーマ	大学	都道府県	高校	特色
美大まるごと体験合宿	東北芸術工科大学	山形県	酒田西高校	2泊3日でアニメーションや浮世絵、彫金などのワークショップに高校生が参加
全国高校生英語スピーチコンテスト	獨協大学	埼玉県	公募	平成元年から行われているコンテスト。4~5分間のスピーチで英語力や内容を競う
高校生インターンシップ	東洋大学理工学部	埼玉県	県内の工業高校	高校生が大学の研究室で大学院生や大学生と一緒に研究を行う
地域活性化シンポジウム	筑波大学	茨城県	土浦第一高校、土浦第二高校、土浦第三高校	2011年に「若い世代による土浦まちづくり提案」を開催。大学教員による出張講義、ワークショップなどを通じて高校生がプランを提示
高校生のための金曜特別講座	東京大学教養学部	東京都	公募	中心は高校生だが、それ以外もOK。中学生から80代まで受講者は幅広い。事前申込不要。駒場キャンパスに直接出向く
海洋に関する「高大連携特別プログラム」	東海大学海洋学部	静岡県	静岡県や神奈川県の水産・海洋系高校	「生物資源の利用(食品加工を体験する)」や「海の生き物を調べる(水族の解剖実験や顕微鏡観察)」、「海洋空間利用と洋上風力発電」などの講座を開講
光回線による遠隔講義	愛知県立芸術大学	愛知県	岩倉総合高校	高校と大学を光回線で結び、双方向の遠隔授業を実現。高校の美術、音楽の正課授業として実施
高校生講座	大阪市立大学	大阪府	公募	高校生および20歳までの大学進学希望者が大学の講義を実体験。文系講座、理系講座がある
そのだインターネットキャンパス	園田学園女子大学	兵庫県	兵庫県や大阪府の高校	eラーニングを用いた高大連携講座。電子的な仮想キャンパスに受講生と教員が寄り合って学習を進める
高校生料理コンテスト	福山大学生命工学部生命栄養科学科	広島県	公募	2011年に「第1回高校生アイディアどんぶり選手権」開催。広島県や岡山県などから16高校が参加
高校生のためのサマーセミナー	松山大学経営学部	愛媛県	公募	高校生に経営学をレクチャーする夏の公開講座。2011年は「流通・マーケティング・リスクと保険」と「経営学」の各15回授業
医療福祉に関する特別講義	国際医療福祉大学福岡リハビリテーション学部	福岡県	大川樟風高校	70分間の授業を年間計25回、放課後と夏休みを利用して大学キャンパスで実施。内容は心の健康、障害者の自立、体のしくみなど

※上記は文部科学省資料および各大学・各高校のホームページなどから得た情報です。詳細は直接お問い合わせください

講義」だが、その差はほとんどない(図2)。そのほか、入学前教育や大学生からのアドバイスも比較的に求められていることがわかる。

高大連携事業に生徒を参加させるときに気になる点は、1位「学校行事との兼ね合い」、2位「生徒に理解できる内容か」である(図3)。

また、大学に対する同様のアンケート調査もある(図4)。関西地区の私立大学に高大連携事業の目的を尋ねたところ、1位は「生徒が自分に合った学部等を選んでほしいから」、2位は「将来の学生の確保のため」と「近隣の高校に対する地域貢献のため」が並んだ。

この2つの調査研究を行った林育教諭(調査当時は私立相愛高校、現在は大阪市立八阪中学校に勤務)は、今回のアンケートやヒアリングを通じ、高校と大学のコミュニケーションの重要性を改めて感じたとという。

「大学は高大連携により学生確保も目指しているようですが、それ以上に学生の大学選択におけるミスマッチを防ぎたいという思いを強く感じました。高校側にも同じ思いがありますが、そのわりには両者の思惑がかみ合わない場面があります。『ぜひとも生の大学の授業を!』と大学が意気込んでも、生徒が理解できないから『それはちょっと…』と高校が尻込みすることがある。意見交換の場を設ける努力がもっと必要ではないでしょうか」(林教諭)

「高大連携」から「高大接続」へ

一部を除けば、これまでの高大連携のほとんどは、「高校生の進路選択の支援」を目的に行われてきたといえる。

図2 (高校進路担当者への質問) 高大連携にどのような企画を望みますか (複数回答)

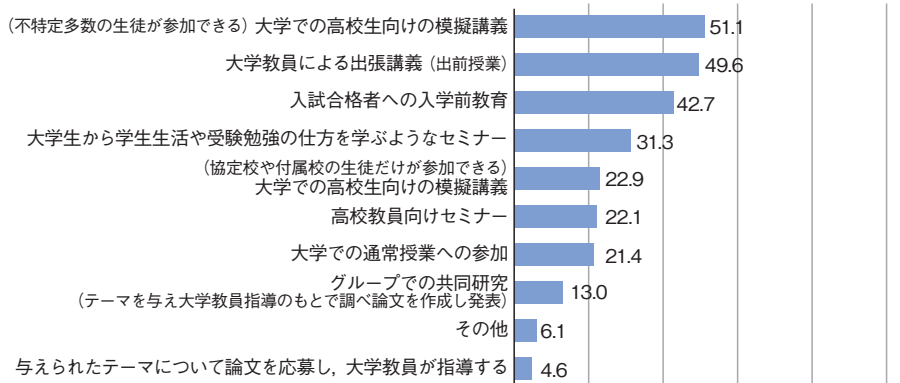


図3 (高校進路担当者への質問) 高大連携事業に生徒を参加させるとき、気になる点は何ですか (複数回答)

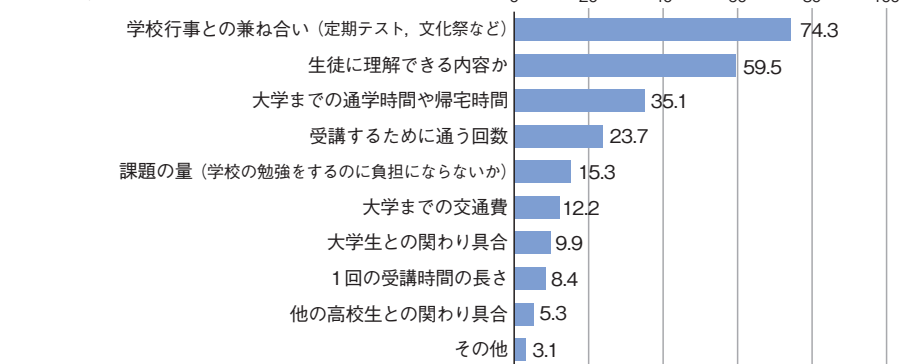
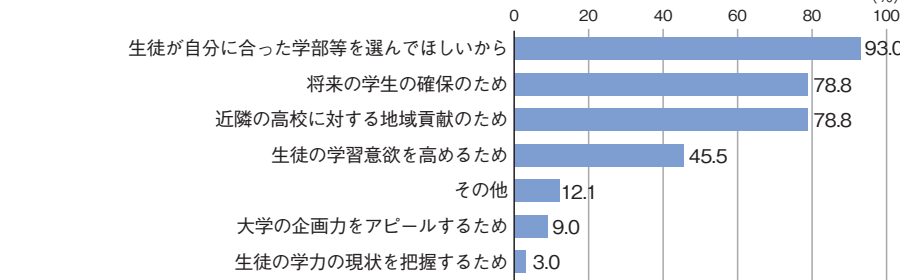


図4 (大学高大連携担当者への質問) 高大連携事業の目的は



※出典 図2、3 関西地区の高大連携事業の実情について(高校アンケート) 関西地区私立高校225校中131校が回答(回答率58.2%)
図4 関西地区の高大連携事業の実情について(大学アンケート) 関西地区私立大学81校中33校が回答(回答率40.7%)

手法としては「大学教員」による一方向の講義・授業、それも「単発」が多かった。こうしたスタイルも高校生と大学とのマッチングを促すという意味では、一定の成果をあげてきたかもしれない。しかし本来、高大連携にはそれ以上のことが期待されてよい。高校と大学がしっかりと手を組めば、もっと連続性のある教育が実現するだろうし、7年間という時間を使って次世代の人材育成を行うこともできる。また、高校や高校生に教育効果がもた

らされるのみならず、大学や大学生が効果を得ることも可能だろう。

実はそうした動きはすでに見られる。このところ「高大連携」ではなく、「高大接続」と名乗る取り組みが増えている。「接続」とは、「連携」よりもさらに近く、太いつながりを意味しているのだろう。

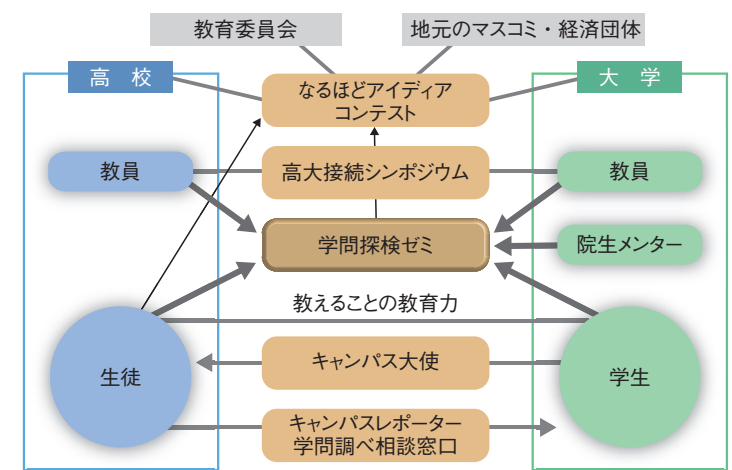
例えば大分大学は、「学問探検ゼミ」を核とした「高大接続教育」を展開している(図5)。学問探検ゼミとは、大学生と高校生が少人数グループをつくり、大学生が自らの専門分野を指導するもの。大学生にとっては「教えることから学ぶ」点が大いという。高校生は学んだ成果を「高校生なるほどアイデアコンテスト」に応募し、そこで新聞社や教育委員会などからの評価も受ける。また、ゼミに参加した大学生は「キャンパス大使」として自分の出身高校を訪問し、ゼミの成果や大学生活について母校に伝える。この事業の推進のために「高大連携推進ワーキンググループ」が設置されており、高校と大学の教員が対等に意見交換しているという。

秋田大学も高校と大学の教員が協力して、教育内容の連続性や接続性を意識しながら生徒・学生の育成を目指す「高大接続教育の実践的プロジェクト」を展開している。授業の相互参観や検討会を設定したり、大学初年次生が高校で「未修得」のままになっている部分を確認できる「高大接続確認テスト」を開発したり、その部分を修復できる「高大接続テキスト」を編集することを計画。eラーニングも予定している。

今年4月に開校した大阪市立大阪ビジネスフロンティア高校グローバルビジネス科は、大学や産業界と連携して高校・大学7年間を見据えた教育を行う新しいタイプの高校。大阪の新産業を担い、起業の精神にあふれ、国際ビジネス社会で活躍できる人材の育成を目標としている。大阪市立大学、関西大学、関西外国語大学と連携し、連携大学の教員が執筆した教科書を使う「高大接続科目」を設けたり、英語、情報、会計などのライセンス取得により連携大学の特別枠や推薦入試での入学につながる仕組みにもなっている。

大阪ビジネスフロンティア高校の例のように「公立」と「私立」の垣根を超えた高校と大学の接続は珍しいが、関

図5 「学びが高きに向かう」 高大接続体制 (大分大学) 5つの事業による教員連携と学生生徒連携の構築



西大学はこれとは別に「高大接続パイロット校」という制度も設けており、そこでも公立高校との接続を実現している。一定以上の学力を有し関西大学入学を強く希望する生徒に対し、大学が提供する入学前の特別プログラム(eラーニングを使った語学力や文章作成力養成講座)を修了することを条件に入学が許可される制度だ。現在、全国の28校と提携関係にある。

入学前教育も「接続」をスムーズにする

ところで、昨今各大学は「入学前教育」にも注力するようになってきているが、それも広い意味では「高大接続」に含んでよいかもしれない。高校教員も入学前教育が充実することを求めているし(図2)、中教審の答申の5つの連携方策のうち、4番目は入学前教育や初年次教育を示しているといえる(p24)。

入学前教育として多いのは、入学決定者に対して課題図書を出したり、特定科目の通信講座を課すタイプのもの。一方でユニークなものもあり、国士館大学法学部のように入学前教育の学習履歴をポートフォリオにして入学後にも生かす大学、立命館アジア太平洋大学のように「入学前留学プログラム」を実施する大学、松本大学のように入学前からキャリア教育を実施する大学などもある。

こうした入学前教育の充実も含め、「高校教育から大学教育への移行」が今後ますますスムーズになっていくことが、高校生や高校、ひいては大学自体にとっても望ましいことは間違いのないだろう。